

## ◆ 学会動向 ◆

## 環境経済・政策学会 2010 年度大会

佐々木 健 吾 (名古屋学院大学)

2010年9月11日から12日にかけて、名古屋大学において環境経済・政策学会2010年大会が開催された。大会要旨によると、今年は180件の報告が行われた。表1に報告分野と報告件数をまとめている。今大会における特色は、企画セッションの拡充であろう。企画セッションは、これまでの大会でも設けられていたが、今大会においては11セッション45件の報告が行われ、これまでにない規模となっている。表2にそれぞれの企画と報告件数をまとめている。なお、前年までに比べて、セッション数がかなり増加しているが、これは、1セッションあたりの時間が短く設定され、割り当てられる報告数が2から3件となったためである。報告件数は、ここ2、3年の大会とほぼ同様であった。個別のセッションで報告が多かったのは「地球温暖化」(28件)である。地球温暖化については企画セッションでも多く取り上げられており、学会の関心が多く寄せられていることがわかる。次いで「環境評価」、「アジア・途上国」、「環境経済理論」のセッションで、それぞれ11件の報告が行われた。

表1 報告分野と報告件数

分野	セッション数	報告数
企画セッション	11	45
地球温暖化	14	28
環境評価	5	11
アジア・途上国	6	11
環境経済理論	4	11
環境ガバナンス	4	9
環境資源勘定・環境指標	2	6
流域管理	3	6
廃棄物	2	5
リサイクル	2	5

地域と環境	2	5
排出権取引	2	4
再生可能エネルギーと地域	2	4
CSR	2	4
環境マネジメントシステム	2	4
再生可能エネルギー政策	2	4
生物多様性	2	4
LCA・ラベリング	1	3
農業・食糧	2	3
国際資源循環	1	2
コモンズ	1	2
自然保護	1	2
水資源管理	1	2
合計	74	180

表2 企画セッション

No.	企画	報告数
1	水環境政策の経済評価と 経済的手段の適応可能性	4
2	東アジアの環境課徴金制度	5
3	“エコ・ウェルズ”創出のシナリオ	3
4	温室効果ガス排出量削減の 経済モデル分析	7
5	国内排出量取引の制度設計： 定量分析によるアプローチ	5
6	エネルギー自立地域の形成と 地域主体形成	6
7	環境評価チュートリアル： 最新テクニックと分析の実際	3
8	グローバル時代における 東アジアの環境ガバナンス	4
9	生物多様性の経済的分析	4
10	気候変動：今後の国際協同行方	5
11	カーボン・オフセット政策の 評価と今後の可能性	4
	合計	45

12日には「環境経済・政策学から見た生物多様性条約 COP10 と日本の戦略」と題された公開シンポジウムが開催された。2010年10月には、学会開催地である愛知県名古屋市において生物多様性条約の第10回締約国会議(CBD-COP10)が開催されることもあり、生物多様性への関心が高まっている中での開催となった。シンポジウムでは、ワイオミング大学のエドワード・バービア教授から“Ecosystem as Natural Assets”と題された基調講演が行われた。バービア教授は、故デービッド・ピアス教授らとともに“Blueprint for a Green Economy”を出版された著名な研究者であり、私自身の研究テーマとも深く関連する先生のお話を間近で伺うことができ、大変貴重な機会を持つことができた。講演内容は、自然資産としてのエコロジカル・ランドスケープの価値付け問題を扱ったものであった。エコロジカル・ランドスケープは、空間的に不均質で、非線形なものであり、その利用や転換の際には、その経済的価値が適切に評価されるべきことが述べられた。これまで、生態系の崩壊については、主に生態学者によって分析がなされてきたが、経済分析においても生態系サービスの価値が評価される必要性が強調されていた。2008年の大会から3年連続で海外の研究者を招待したシンポジウムが開かれたことになるが、これから先の学会においても、国際的に活躍をしている研究者の話を拝聴する機会が持てれば幸いである。続くパネル・ディスカッションでは、栗山浩一氏(京都大学)から「生物多様性の価値と環境政策」、林希一郎氏(名古屋大学)から「生物多様性政策における経済的手法とCOP10」、黒田大三郎氏(環境省)から「生物多様性とビジネス」の報告があったのち、フロアを含めたディスカッションが行われた。

以上が学会の全体的な様子である。以下では、わたしが参加したセッションについて報告をさせて頂く。当然のことながら、わたしひとりで180件の報告全てを聞くことは不可能であるので、わたしの関心と関連した研究報告の紹介となってしまうことをお許し頂きたい。1日目の午前は、地球温暖化の2つの

セッションに参加し、3つの報告を伺った。高村ゆかり氏(龍谷大学)からは「京都議定書の第一約束期間と第二約束期間の間の制度の空白への対処方策に関する法的検討」が報告された。本報告では、コペンハーゲンで開催された気候変動枠組条約のCOP15において実質的な合意がなされなかったために生じうる、ポスト京都議定書の制度の空白への対策について論じられた。山口光恒氏(東京大学)からは「なぜ25%削減なのか-究極目標についての日本案の策定と世界への発信-」が報告され、温室効果ガス排出削減の目標が、科学的知見や対策の費用便益というよりも、政治的要因によって決定されるような日本のガバナンスの問題点が指摘された。鷺田豊明氏(上智大学)からは「応用一般均衡モデルによる温暖化被害と適応の推計-農林業分野-」が報告され、低開発国では、適応(Adaptation)を行わないことにより収量の低下がみられることが示され、適応策の実施の重要性が示唆された。地球温暖化は、本学会でも重要視されている問題であり、他のセッションにおいても有益な報告と議論が行われたことと想像する。

1日目の午後(1)は企画セッション「環境評価チュートリアル」に参加した。まず、三谷羊平氏(コロラド大学)から「経済実験の実際(z-treeの使い方)」が報告された。内容としては、経済実験のソフトウェアであるz-treeの実施方法の紹介と、公共財供給ゲーム実験の実例が示された。柘植隆宏氏(甲南大学)からは「コンジョイント分析の実際(GAUSSの使い方)」が報告され、Limdepなどのソフトウェアのユーザーで、GAUSSへの移行を考えている初心者向けに、コンジョイント分析のデータ整理の方法と、解析プログラムの組み方が解説された。いずれの報告も、実在のソフトウェアを対象とした具体的なチュートリアルとなっており、大変わかりやすかった。(続いて星野匡朗氏(東京工業大学)から「ヘドニック法の最先端(空間ヘドニック法)」の報告があったが、次のセッションでの討論者の役目があったため伺うことはできなかった)

1日目最後は、「環境資源勘定・環境指標(2)」のセッションに参加した。まず藤井秀道氏(東北大学)から「国内製造業における VOC 排出量を考慮した生産性分析」が報告された。売上高に対する VOC 排出の効率性評価が試みられ、10 業種において経済効率と排出削減の両立があったことが示された。また、環境規制の導入や業界団体への所属が改善を導くことが示された。高科和史氏(東京工業大学)からは「MDGs 達成のための森林保全が経済に及ぼす影響の評価」が報告され、途上国での森林保護を達成するためには、森林面積確保のために喪失される食糧生産への援助が必要であることが一般均衡モデルによって示された。最後に野上裕生氏(アジア経済研究所)の「持続可能な発展の指標による重層的不平等の評価」の報告が行われ、わたしはその討論者を担当した。野上氏の研究は、私自身の研究テーマである持続可能性指標とも関連しており、討論者を担当させて頂き大変勉強となった。野上氏からは、持続可能な発展論の文脈のもとでの不平等の扱いに関する議論の整理が必要であることが指摘され、重層的不平等の検討とその評価に関する例証が報告された。わたしのほうからは、不平等であると判断するための基準はどのように設定しうるのであるのか、平等でなければならぬとする際の規範はどのようなものであるのか、といった点について質問をさせて頂いた。

2日目午前、複数のセッションに参加を

した。わたしの研究テーマと関連する報告として興味深かったのは籠橋一輝氏(京都大学)の「本質的自然資本と持続可能な発展－理論的基礎と課題」であった。持続可能な発展が、さまざまな識者によって解釈、定義されてきたことはよく知られたことである。その定義は100を超えるともいわれており、当然のことながら定義が異なれば持続可能な発展のために維持すべきものも異なってくる。報告では、本質的自然資本(Critical Natural Capital)を持続可能な発展の実現のキー概念として位置づけ、4つの異なる持続可能性概念を本質的自然資本との関係という文脈で整理がなされた。また、自然資本の閾値はどのように決定されうるのであるのか、あるいはすべきなのかという重要な課題が示されていた。この点は、持続可能性の判断の際に避けては通れない問題であり、当該分野の研究の発展が望まれる。

今年の大会では過去最多の企画セッションが組まれた。相通じるテーマについて多数の報告が同一セッションで行われることで、より専門的で発展的な議論が可能となろう。今後の学会においても多数の企画セッションが組まれることが望まれる。また、海外の著名な研究者の招待講演も引き続き企画されることを期待する。環境経済・政策学会のますますの発展を祈念して、2010年大会の学会動向の報告とさせて頂きたい。